長坂尚登豊橋市議の活動報告会

人脈と発信力 変革の可能性

4月26日、駅前大通の名豊ビルで豊橋市議の長坂尚登氏の活動報告会が行われた。2年前のこの日、豊橋市議会選挙の投票日であり36人が当選の喜びに浸り、新たなスタートに立った。そのうちの一人、長坂尚登(33)氏(豊橋だいすき会)は新人トップ当選を果たし、「東大卒、最年少議員」で話題になり何かと注目を集めてきた。あれから丸2年、立候補前から彼を取材してきた立場から、彼がどんな人を集め、どんなことを報告し、これからどうしようとしているのか興味は尽きなかった。

■会場を埋めた若者

「参加者が少なかったら、空席が目立つからと当初は60席ほど用意しました」(長坂氏)が、開会前に立ち見ができるほど。「最終的には100セット用意した資料が足らなくなりました」と受付係。この2年間SNSを使ったこまめな情報発信と豊橋駅東口で「豊橋だいすき」会報を配る街頭活動が、地道に人脈を広げていることをうかがわせた。

■人口減少の中で

活動報告の中で「議会ってどんなところ?」「一人でどうやってるの?」「これからの豊橋は?」について丁寧に説明を加えていた。

何より「豊橋市議会を傍聴に来てください」と、市役所の全景から1階のエレベーター乗り場、そして8階で降りて通路を歩き、傍聴受け付け、傍聴席、傍聴席から見た議会全景、市長や各部長の席の紹介など順番に写真で説明。議会とは縁遠いと思われる若い人たちに丁寧に説明する姿勢は好感が持てた。

身近な小学生の数の変化で人口減少問題を説明したのは、親しみが持てた。

■1人だから味方づくり

「豊橋だいすき会」を名乗り、一人会派であっても市職員をビジネスパートナーと位置付け、味方づくりに専念し、決して追及したりはしない。

特に若い職員の中に「あなたの10%が豊橋を変えるかもしれない」と問題意識を持った市の職員が増えてきていること、新しい波が市役所の中に変化をもたらしていることを紹介していたが、若者の変化に敏感な感性に感心した。

■豊橋の良さ・悪さ

第二部では、東京や新潟、大阪、滋賀などから、結婚や仕事で豊橋に移り住んだ県外出身の若者が、豊橋のいいところやダメなところを率直に語っていた。

「結婚を機に豊橋へ来ましたが、豊橋って、世間が狭いなあと思いました。知り合いをたどっていくと知り合いばかり。みんな親戚や知人でつながっているのですね」「滋賀県から大学への進学で豊橋へ来ましたが、豊橋は都会だなあと実感しています」「友達が豊橋へ遊びに来てくれた時に、連れていく所に困る」「結婚する予定だった彼が、豊橋のお土産ですと、うなぎパイをもって両親にあいさつに来たのはおかしかった。豊橋を代表するお土産って、ないのですか」「産直の野菜が安くておいしい。路面電車が楽しい」など、面白かった。

■将来は交渉会派に

第三部はフリーデスカッション。「これからどうされようとしているのですか」という参加者の質問に答える形で長坂氏は、「現在は4年任期の折り返し点ですが、2年後には選挙があります。現在は一人会派ですが、なんとか同じ考えの仲間を増やして、3人の交渉会派になり力を発揮していきたい」と話した。

私の知る限り、一人会派で頑張ってきた、あるいは今も頑張っている市会議員がいるが、一人が二人になることすらかなわず、一人会派で終わっていくケースが多く、その道は並大抵ではない。

しかし、彼のネットワーク力と発信力がそれを実現するかもしれない。そんな可能性を感じさせる「報告会」だった。